

「主体的な進路選択」を育む指導に向けて

最後に、京都大・塩瀬隆之准教授のインタビューと3校の実践事例を通じた編集部からの提案と自らの意思と責任で進路を選択していく力を育てるための指導のポイントをまとめた。

今回の特集を通して編集部が伝えたいこと

「必要感」の醸成と
「決める」場面が設定されているか

今号では、「自分の意思で主体的に物事を判断したり、選択していくことが出来ない生徒が多い」「中学生にとって最も大きな選択の1つである『進路指導』に対する学校の求心力が低下している」という先生方の声を受け、これからの中学校で必要になる進路指導やキャリア教育について考える特集を組んだ。塩瀬隆之准教授や3校の学校現場の取材を通して見えてきた「主体的な進路選択」に向けた指導のポイントは、大きく2つあったように思う。

1つは、日々の教育活動の中で、進路を主体的に考える「必要感」をどれだけ醸成でき

ているかということである。京都市立大宅中学校の職場体験と探究活動を関連させた取り組みには、単なる体験活動で終わらせるのではなく、体験を通じて生徒目線で更に社会に役立つモノや仕組みを考えさせながら、学ぶこと（自分の頭で考え、工夫すること）と働くこととのつながりを意識させる指導の工夫がなされていた。また、福生市立福生第一中学校は、誰かのために主体的に動いたり、物事を判断しようとする意欲を育てるためには、まず生徒の自己肯定感や自尊心を高める必要があるという考えの下、職場体験先を選定し、活動を実施していた。

2つめは、教育活動の中に、生徒自らが物事を選択・決定する場面をどのように設定するかということだ。この点について、塩瀬准

教授は、選択肢の設定の仕方や教材の工夫を通して、鳥栖市立田代中学校は、客観的なデータを活用した自己の振り返りや勉強計画の立案・修正という課題を通して、生徒自身に選択・決定させる場面づくりのヒントを示していただいたように思う。

「単に生徒に決定させたり、客観的な評価に沿って指導をしているだけでは、『進路相談』に過ぎず、『進路指導』ではない。生徒の選択力を高めようとする計画的な指導の上に、選択の機会が与えられてはじめて、生徒は主体的な選択が出来る。そこまで指導をするから『進路指導』なのだ——これは弊誌を応援してくださいとある校長先生の言葉であるが、まさにこのような信念を持った先生方の日々の選択力を育む取り組みや、進路意欲を育む関係づくりがあつてはじめて、生徒は主体的に進路を選択していくことが可能になるのではないだろうか。

主体的な**進路選択**——自らの意思と責任で決める力を育てる

インタビュー・3校の取り組みに学ぶ

「主体的な進路選択」に向けた指導のポイント

選択の不安やモヤモヤと向き合う訓練を積ませる

進路はいったん決まったとしても、本当にそれで良かったのかどうかモヤモヤと悩み続けるもの。大切なことはモヤモヤを解消することではなく、モヤモヤを抱えながら前に進んでいける耐性をいかに身に付けさせるかにあると、塩瀬隆之准教授（P.8）から指摘があった。

耐性を育てる指導の工夫として、塩瀬准教授は「進路選択後の進路指導」を挙げる。具体的には、生徒に自分の選択について教師や先輩に語らせることを通して、自分の選択を受け入れる機会をつくるというものである。卒業生が先輩のために高校の説明をする取り組みはよく見られるが、卒業直前の3年生が「進路を前向きに受け入れる」ために、1、2年生に自分の受験体験を話す機会があっても良いのかもしれない。

正解のない問題を与え自分なりの答えを出させる

塩瀬准教授は、自分なりの答えを見つけて出す力を付ける指導として、「この情報だけで

は1つに定まらない」という選択項目を設ける工夫を提案した。選択肢の中に必ず正解があるとは限らない問題を解かせることで、生徒の正解を見つかるまでの選択肢との向き合い方や、結果重視の学習観を変えることが出来るのではないだろうか。比較的、教科や単元の特性にかかわらず取り入れやすい方法であり、教科指導と関連付いた指導の工夫としても参考になるだろう。

自分なりの答えを見つけて出す経験を積ませる実践としては、京都市立大宅中学校（P.12）の探究活動も興味深い。3年生の進路決定時まで、生徒が自分で進路を描ける力に身に付けさせるといふ目標の下、ポスターセッションや修学旅行などの教育活動を位置付けて、計画的にテーマを掘り下げる力や論理的思考力を育んでいる。従来から行ってきた教育活動に、キャリア教育の要素をうまく取り入れている実践例として、参考になるだろう。

客観性の高いデータを与え自身の取り組みを振り返らせる

鳥栖市立田代中学校（P.17）では、マナー検定や生徒目標アンケート、定期考査などの

結果を生徒に伝え、生徒がそれを基に取り組みを振り返り、主体的な改善に結び付けるという流れで指導をしていた。

生徒が自ら改善に取り組みするためには、まず生徒が自身の取り組みを正確に振り返る必要があるが、その材料が教師や生徒の主観に基づいた評価のみに偏っている場合は、十分な振り返りはできず、有効な改善点も見つけ出せない。そうした意味で、客観的なデータを教師の生徒理解に使うだけでなく、生徒が自分の取り組みを正確に評価し、進路を判断する材料とするために提供していくことも必要なのではないか。

自己肯定感や自尊感情を育み進路に向き合う心につなげる

福生市立福生第一中学校（P.22）は、まず進路に前向きに向き合う心を耕すために、保育園や高齢者福祉施設に体験先を限定し、職場体験を実施していた。

多くの学校では、職場体験を「勤労観を育む」取り組みとして位置付けているが、福生第一中学校では、勤労観を育む前提として、まず「自分は人の役に立てる」という自己肯定感や自尊感情を育てることを重視している。勤労観の育成は重要だが、福生第一中学校のように「勤労観を育む上で、まず生徒に何が必要か」という観点から職場体験の見直しが行われても良いのではないだろうか。